分詞構文の心 ―Pedagogical Grammar― を基盤にして

A PG analysis of Supplementive Clauses in English

野 口 正 樹
Masaki Noguchi

Abstract

This paper discusses semantic motivation of the supplementive clause in English. The assumption here is that this grammatical construction is not semantically arbitrary nor simply a stylistic device, with its varied uses having a conceptual core running through them. The construction is more than a convenient means of condensation. The point in question is that the interclausal temporal relationships of simultaneity and successivity serve a pivotal role in motivating the usage of the construction, although it seems to have a broad “general purpose” linking function. The varied ways the basic notions are invoked or extended are shown to combine to produce a coherent overall framework of a grammatical form known for its marked semantic diversity.The supplementive clause implies an accompanying circumstance to the situation described in the matrix clause, often resulting in evoking a visual image in the mind of the listener or reader. The information obtained from such analyses provides insights for improving pedagogical grammar of the supplementive construction.

Ⅰ　はじめに

本論は，pedagogical grammar（PG: 指導者文法）に基づき，英語分詞構文に関わる教師の明示的文法知識を構築することが目的である。既存の文法書の多くは伝統的文法記述に終始し，教室現場で参考になる内実を伴っていない。加えて，PG 視点で体系的に編纂された文法書が皆無である。第２章で pedagogical grammar の定義を振り返り，第３章では，確認した PG の定義に基づき，日本の公立中高英語科教育の grammatical items の１つである participial constructions を取り上げ，教師の明示的文法知識の向上を目指す。最終章では以上の論議を要約する。

Ⅱ　指導者文法

野口（2017）で定義した指導者文法を再掲する。英語科教育における教師側から見た PG は３通りに大別できる。文法知識および文法運用と文法指導である。これら３項目は明示的 / 非明示的に各々下位区分される。

（１）（明示的 / 非明示的）文法知識
（２）（明示的 / 非明示的）文法運用
（３）（明示的 / 非明示的）文法指導

学習者視点から捉えた文法も３通りに区分される。文法学習および文法知識と文法運用である。これらも全て明示的 / 非明示的に更に２分される。

（１）（明示的 / 非明示的）文法学習
（２）（明示的 / 非明示的）文法知識
（３）（明示的 / 非明示的）文法運用

指導者文法と学習者文法を一覧すると以下の表１の通りとなる。

表１　指導者文法の位置づけ

	学　習　者　文　法		指　導　者　文　法	
1	明示的	文法学習	明示的	文法指導
	非明示的		非明示的	
2	明示的	文法知識	明示的	文法知識
	非明示的		非明示的	
3	明示的	文法運用	明示的	文法運用
	非明示的		非明示的	

次章では，表１の指導者文法における明示的文法知識に焦点を当て，分詞構文指導に貢献しうる pedagogical grammar を明らかにする。

Ⅲ　分詞構文の指導者文法

教師が活用できる references は，市販の文法書・辞書・textbook 付属の teacher’s manual および online で散見される文法記述が一般的である。しかしながら，これらの多くは表層構造的な説明に終始し，troublespots の予測や errors の分析には役立たない。基本的な説明の一部を表２で示す。

表２　分詞構文の形とはたらき

分詞構文：分詞で始まる語句が全体として副詞のはたらきをする Dad is in the kitchen, making a salad. 「父さんは台所にいて，サラダを作っている」	
特　　徴	例　　文
1　同時に行う動作	I stayed in bed, using my smartphone. 「携帯を使いながらベッドにいた」
2　引き続いて起こること	A helicopter crashed, resulting in five deaths. 「ヘリコプターが墜落して，５人の死者が出た」
3　原因・理由	Being so tired, Yui went straight to bed. 「とても疲れていたので，結衣は真っ直ぐにベッドへ行った」

従来の文法的記述・説明ではなく，pedagogical grammar 構築に役立ちうる視点を提供するため，以下の９点について分詞構文が捉える eventuality（出来事）を考察する。構文とは，それ自体でひとつの事柄を表せる表現である。「分詞」が一つの構文を作るのが分詞構文である。なお、「分詞構文」の名称で組織化したのは斉藤秀三郎（1898-99）に由来する。

３．１　分詞構文と接続詞文との差異

以下の（1a, 1b）を比較する。

（１）a. When I was jogging in the rain, I bumped into Hiroshi.
　　b. Jogging in the rain, I bumped into Hiroshi.

(1a) は I was jogging in the rain と I bumped into Hiroshi の関係を when で明示している。２文の論理関係は「時」であると接続詞 when が明確に主張している。意味関係を明瞭に意識しているのが特徴である。(1a) の表現主体の意識の流れを表したのが以下の (2) である。

（２）a. When I was jogging in the rain, / I bumped into Hiroshi.
　　b. When A, / B.　　「A していた時に，B した」

When A, / B 構造の場合, 強力な接続詞 when が存在するため, A と B の境界は明白である。つまり，論理関係を明確にする時に接続詞を使用すると言える。学習者はこの点の意識が弱い。接続詞は「A と B をつなぐ」という働きは理解しているが，A と B の接続関係を明確にしている点への気づきが不十分である。high-context language である日本語を母語に持つ学習者に対しては，接続詞導入時にその意味機能を十全に学ばせたい。

次に，(1b) = (3a) の schematic image を (3b) で図示する。

（３）a. Jogging in the rain, I bumped into Hiroshi.
　　b. A・・・⟶ B.

(3a) の前半 A と後半 B は，あたかも連続動作のようであり，A･B ２つの状況が折り重なっている。分断感はない。A から B へは流れる動作なので，境界は不明瞭である。主節 B の内容と切れ目なく，連続体を成す形で状況設定する。(2a) の接続詞 when が持つ境界明確化とは好対照を成す。分詞構文を使用した場合，A と B の関係は曖昧である。分詞節には，文の最重要構成要素である主語と時制が欠落している。A と B 両者の関係（時・理由・結果）は，文脈･常識で決定される。この曖昧性が残る部分が分詞構文の肝である。以下の (4) で分詞構文の特性（文性）を確認する。

（４）a. While listening to some soft music, I was able to fall asleep.
　　b. By listening to some soft music, I was able to fall asleep.
　　c. Listening to some soft music, I was able to fall asleep.

上記 (4) の３文を相互参照すると，分詞構文の機能が浮き彫りになる。(4a) は接続詞 while を使用して，simultaneity（同時性）を明示している。(4b) の前置詞句を用いた表現でも，cause-effect（因果関係）を by ～ ing form が代弁している。他方, (4c) の分詞構文表現では，

論理関係は形態上 ambiguous であり（4a, 4b）に比して不明瞭である。Jesperson（1909−42）の指摘通り，vague simultaneity（ゆるやかな同時性）と言えよう。

なお，分詞構文の導入に際し，現行では以下の説明がまかり通っている。

（５）1. 接続詞を消去。 While I was listening to some soft music, I was able to fall asleep.
2. 従属節と主節の主語を確認。I was listening to some soft music, I was able to fall asleep.
3. 同一主語の場合，従属節主語を消去。I was listening to some soft music, I was able to fall asleep.
4. 主語が異なる場合は，その位置に保持。
5. 従属節の主動詞を分詞化。 Listening to some soft music, I was able to fall asleep.

(5) の指導が無意味とは断定できない。mechanical drills の一環として，学習者に分詞構文の構造の一端を理解させる方法としては否定しない。問題は，この手順で導入するだけでなく，この導入そのものが分詞構文指導の完成形となっている事実である。これでは，接続詞文と分詞構文は相互に入れ替え可能な代替表現であるとの誤った概念を植え付ける。さらに悪いことに，この導入方法では，分詞構文の存在意義は全く伝わらない。高校生どころか英語専攻の大学生ですら，分詞構文をいつ・どこで使うかの基本を理解していない。まさしく英語科悪教育である。

分詞構文と接続詞文を以下の通り対比すれば，両者の差異を伝えることができる。

（６）分詞構文： 意味関係が形態上曖昧
１. 節同士の論理関係をほのめかす（余韻を残しつつ状況描写）
２. ２つの行為の連続性・同時性を表すのに効果的

（７）接続詞文：意味関係が形態上明確
１. 状況を明白に描写する
２. 論理関係に応じた接続詞を用いる

従って，分詞構文の肝は indeterminacy と言える。semantic relationship（意味関係）は曖昧であり，versatile relationships と形容されるように様々な意味に解釈できる。特定の論理関係を明示しないため，supplementive clauses（補足分詞節）あるいは free adjunct（自由付加詞）と呼ばれる。Quirk et al.（1985）を参考に，分詞構文の本質を以下にまとめる。

（８）1. Participle clauses do not signal specific logical relationships.
2. The formal inexplicitness allows considerable flexibility.
3. The actual nature of circumstances has to be inferred from the context.

３．２　接続詞文および分詞構文の特徴

前節３．１を受けて，接続詞文および分詞構文の特徴を以下にまとめる。Grice（1991）の

cooperative principle（協調原理）を持ち出すまでもなく，maximum of quantity and manner（量および様態の公理）を満たすのは接続詞文になる。(7) の通り状況を明白に描写するため，曖昧さを排した表現になる。そこで，接続詞文の特徴は以下の２点に集約される。

（９）接続詞文の２大特徴
　　１. 一般的表現（話し言葉・書き言葉）
　　２. 論理関係を明示する文体（論文，科学的事実）

接続詞文は一般的な表現であり，正確さが要求される文体に適している。従って，感情的な抑揚を排した平たい文体の印象を持つ。もっとも，話し言葉であれば tone/intonation により臨場感は容易に醸し出せるので，話し言葉の使用に何ら問題はない。

他方，分詞構文の特徴は以下の３点にまとめられる。

（10）分詞構文の３大特徴
　　１. formal な文体（基本的に文章語：演説・研究発表）
　　２. 物語モード　（物語や随筆・小説など文学作品）
　　３. 簡潔な表現　（新聞記事）

分詞構文は cooperative principle に一部違反するが，その副産物として conversational implicature（会話の含み）を生み出すことになる。先ず，unmarked な接続詞文を選択しないことにより，formal で格調高く述べる時に多用される。文頭の位置は特に文語的である。基本的に written language に適しているが，話し言葉でも公式の speeches/news/lectures 等に使用される。もっとも，stilted（大袈裟）に響く傾向があるので，日常会話で使用すると本を読んでいるような印象を与える。

次に，物語モードで多用される。山岡（2005）の分析が参考になる。(11a) は Hemingway (1952) の *The Old Man and the Sea* からの引用で，その分詞節を接続詞節に言い換えたのが (11b) である。

（11）a. He washed his left hand and wiped it on his trousers. Then he shifted the heavy line from his right hand to his left and washed his right hand in the sea … ‘He hasn’t changed at all,’ he said. But watching the movement of the water against his hand he noted that it was perceptibly slower.
　　b. As he watched the movement of the water against his hand, he noted that it was perceptibly slower.

(11b) の接続詞を用いた as 節は論理関係明示が前面に立つため，登場人物の内面描写という柔らかな touch が消えてしまう。主節 he noted that … 以下を明確な時間枠の中に押し込め，語り手の意識を通した描写になる。一方，(11a) の分詞節で表現された original は，登場人物である老人（he）の視点が支配している。語り手は老人の視点に移入しているが，老

人がこの場面の意識の主体である。「今まさに手に当たる水の動きをじっと見ていると，あることに気付いた」という老人の目から見た生き生きした描写となる。watching という非定形の分詞を活用することにより，語り手の声が消え，水をじっと見ている登場人物の意識が直接伝わるのである。これは，～ ing form の持つ躍動感・臨場感に依るところが大きい。重量感と深刻さに欠ける反面，軽さとスピード感がある。また，主節と分詞節の関係が明確でない this lack of explicitness が fiction では有用になる。緩やかかつ滑らかな接続が可能になる。論理関係は希薄であるが details を描写して imaginary world を構成するのである。

第３の特徴は簡潔な文体になる。compact で勢いのある文体のため，文の economy（経済性）に貢献する。分詞構文は一種の省略表現である。

問題は，以上で述べた接続詞文および分詞構文の functions が教室現場で一切触れられていない事実である。学習者は接続詞文から分詞構文への書き換えを強制され，いつ・どこで使うべきかの情報を全く伝えられずに分詞構文の学習を終了する。教師が分詞構文の pedagogical grammar を持ち合わせておれば，rule のみならず use の側面から学習者を支援できる。

３．３　分詞構文は使える必要があるか

前節３．２で述べた通り，分詞構文は基本的には文章語で formal である。従って，通常の会話ではあまり使われないため，production level まで引き上げる必要はない。ただし，日常会話で使用される用法が１つある。

（12）They had a nice time, singing together.

(12) は文尾にある分詞構文で「～しながら，そして～した」の意を表す。日常会話のみならず書き言葉でも重宝される用法である。主語が先にあるので，この用法は追加説明に好都合である。分詞構文の 80％以上がこの付帯状況の用法である。意味の上で最も曖昧な付帯状況が分詞構文の最大の使い所である。そこで，分詞構文は recognition level　に基本的に留めてよい文法事項であるが，(12) で述べた付帯状況に限り production level にまで高める必要があろう。中高の学習者が日頃耳にする洋楽の歌詞にも頻繁に使われており，違和感はないはずである。

教室現場では，柔軟な解釈・表現を可能にする分詞構文の用法を以下の５つに分類する指導が横行している。この指導の契機は Nesfield（1912）の孫引きに端を発するが，現代英語には通用しない。

（13）1. temporal　　（時間）
　　2. causal　　（理由）
　　3. conditional　（条件）※ rare な用法
　　4. concessive　（譲歩）※ rare な用法
　　5. circumstantial（状況）

分詞構文の本質が曖昧化であるため，乱用は危険である。これら５用法は，文脈によって常識的に決まる二つの事柄の関係付けの仕方を反映する。

（14）a. Seeing the policeman, they ran away.
b. When they saw the policeman, they ran away.
c. As they saw the policeman, they ran away.

（14a）は本質的に曖昧であり，まさに分詞構文である。意味は分詞節と主節の関係から合理的に推論されるのが普通であるが，（14a）は（14b）にも（14c）にも解釈可能である。これを一義的に決めようとする指導は愚の骨頂である。

（15）a. Crossing the street, Ken had an auto accident.
b. Crossing the street, Ken went into a convenience store.
c. Crossing the street, Ken took a shortcut to school.

分詞構文自体に a priori に複数の異なる意味があるわけではない。（15a）は同時性〈while 読み〉，（15b）は動作順序〈after 読み〉，（15c）は手段〈by 読み〉になるのは結果論である。同一の分詞節 Crossing the street の意味は主節との関係により推論される。

このようにいわば不安定な分詞構文の用法全てを産出させるのは至難の技であり，より正確には不可能に近い。分詞構文使用の real-life situation を考慮すると，一つの用例を除き理解レベルに留めておいて十分である。上述した通り，第５用法の circumstantial use のみを production level に引き上げるのが公立の高等学校における英語科教育の役割である。教師が分詞構文に関わる十全な PG を持ち合わせておけば，用法の取捨選択やそれに応じた例文作成は適切なものとなる。

その際，指導上の留意点は２つある。先ず，接続詞文と分詞構文を用いた書き換えは便宜的であることを教師は心得ておく必要がある。Focus on forms の形で初学者に分詞構文の構造を説明する際の一方法としては使えるが，分詞構文の function や use を併せて必ず伝えることが肝要である。接続詞文との対比はあくまで目安に過ぎない。

次に，分詞構文のこころは，文の意味を意図的に曖昧にするところにある。Grice の cooperative principle から逸脱するように一見思えるが，それは正しい解釈ではない。曖昧な表現を避けるべきとの様態の格率を破ることにより，conversational implicature を持たせることは既述した。もっとも，これは native speakers of English の use である。日本の高校生に対しては，文意が不明瞭になるので多用しないとの指導は欠かせない。分詞構文は，attendant circumstances（付帯状況）を除き，基本的に recognition level（理解レベル）に留めておくべき言語材料である。

３．４　分詞構文の頻度

分詞構文および他の副詞句・節の頻度を比較した場合，通常の接続詞文が最も頻度が高い。conversation の 90％を占めると言われている。次に高頻度なのが to-infinitive である。

academic prose で特に顕著であり，news → fiction → conversation の順で頻度が下がる。第３に分詞（ing 形）が位置する。３．３節で記述の通り, fiction での使用が目立つ。これは，分詞節と主節の関係を明示しない非明示性が fiction に役立つからである。自由奔放な記述で想像上の世界を築き上げるのに最適な form である。一方，会話での頻度は極めて低くなる。最後に分詞（ed 形）が挙がる。この形式は全ての genre で低頻度であり, 稀な使用になる。

また，ing 形分詞構文の場合，文頭に置く形は主節後よりかなり少ない。話し言葉のみならず書き言葉においても同じ傾向である。これは分詞構文が書き言葉で多用される理由をも説明する。つまり，思いついた順に情報を並べる話し言葉に向かないからである。一方，物語や随筆などの主観的文章では前置型の頻度が増す。重要な情報を後置することで読者の興味を引く手法である。他方，新聞記事や論説文では後置型が頻用され，簡潔な表現に寄与している。

高校の教育現場では，［完了形 / 独立 / 否定語・形容詞・名詞で始まる］各種分詞構文を金科玉条のごとく大事に扱ってきた。この指導法は頻度に関する視点が不足していたことも原因の一つである。これら複雑な分詞構文の使用頻度は低い。分詞節と主節の意味関係を読み手の世界知識に照らし合わせて推論を求めるのが分詞構文である。過度の複雑さは百害あって一利なしである。なお，with を用いた同様表現の頻度は高い。with-construction の例を以下に掲げる。

（16）a. I don’t have a problem with people saying anything.
b. You need to get your sweaters ready with fall coming soon.
c. With this being a new album, they needed something new.
e. *With being a scholar, I have to read academic journals. [→ Being a scholar, …]
f. * Shota was driving, with listening to music. [→…, listening to music]

３．５　分詞構文の４つの働き

分詞構文の働きを以下の４点に集約する。

（17）１. 拡充化
２. 焦点化
３. 簡潔化
４. 潤滑化

第１の働きは拡充化である。

（18）$_{A}$(Hanako wore expensive jewelry), $_{B}$(showing off her wealth).

(18) の文意は「花子は，高価な宝飾品を身に纏い，金があることを誇示していた」である。A を先出ししてから B で厚みを付ける用法である。

第２の働きは焦点化である。

（19）a. Lying in the sun like this, I feel perfectly at ease.
b. She jumped into her car, then she drove off in pursuit.
c. Jumping into her car, she drove off in pursuit.

３．１及び ３．２節で検討した通り，（19a）は継続する過程を強調した表現と言える。これでは従来の説明と大差ない。一方，主節動詞の動作に spotlight を当てて（19c）を見直してみる。「彼女は車に飛び乗り，追跡して走り去った」とは２つの連続する行為である。（19b）に比して，（19c）は，最初の行為 jumping を従属的な位置へ退かせ，「飛び乗ってどうなった？」の疑問に答える形で主動詞 drove を導入している。平板な（19b）とは異なり，強弱を伴った視点移動を実現している。逆の観点からは，分詞構文が自らを格下げして補足説明に徹していると捉えられる。

なお，この焦点化には制約がある。分詞構文は形式の上で主節に依存していることは先に述べた。これは内容面での従属に繋がる。

（20）a. Picking up the stick, the girl threw it at the goat.
b. *The girl threw a stick at the goat, picking it up.

（20a）が容認可能になるのは，先行文脈の内容を分詞節が後続する主節へ引き継いでいるからである。つまり，分詞節の内容から予想される事態が先行文脈に登場しているのが前提である。例文の性質上，先行文脈が切り離されている点に注意する必要がある。従って，（20a）の the stick は前方照応で適格である。他方，（20b）は容認不可である。一つに，出来事の発生順序と語順の不一致が挙げられる。但し，この不一致は時として起こり得る。より重大な点は，分詞節の内容が主節および先行文脈から容易に予測可能なものでなければならない。「ヤギに棒を投げた」事態から予測できないほどに豊かな内容を分詞構文は担えないのである。容認可能な分詞構文の条件は，「先行文脈依存性」と言えよう。この条件は，懸垂分詞構文に意外な答えを与える。

（21）Being Christmas, the school was closed.

（21）は，分詞節と主節の主語が異なるため懸垂分詞構文と分類され，規範文法で容認不可となる。ところが，記述文法では容認される。分詞節の意味上の主語と主節の主語を reader が容易に理解できるからである。文を越えた文脈や場面と繋がれば容認可能性はさらに上がる。分詞構文の先行文脈依存性の副産物である。もっとも，pedagogical grammar の観点からは（21）のような懸垂分詞構文を推奨するわけにはいかない。formalists になる必要はないが，nonnative speakers of English である学習者が意味的に距離のある分詞構文をいつも正しく解釈できるとは限らないからである。

第３の働きは簡潔化である。

（22）a. Hanako wore expensive jewelry, showing off her wealth.

b. Hanako wore expensive jewelry, which showed off her wealth.

両者を比較した場合，(22a) は (22b) より１語少ないので書き言葉で重宝する。洗練度が増すのである。簡潔な表現を旨とする新聞で多用される理由である。書き言葉の鉄則は The shorter, the better である。日本語に比して, 英語は冗長性を嫌い簡潔性をより好む。そこで, 分詞構文という economy of words（無駄のない言葉遣い）を発達させた。同一内容を伝える場合，３語より２語，２語より１語で伝える方が良いとする言語が英語である。一方，話し言葉では逆転現象が生じる。

(23) a. Hanako wore expensive jewelry, showing off her wealth.
b. Hanako wore expensive jewelry. She likes showing off her jewelry, you know.

(23a) は話し言葉では少々分かりにくい。ところが, (23b) は, (23a) の後半部分を独立させ, より理解し易い形となる。書き言葉と異なり, 話し言葉では語数が増えても通常は問題ない。

第４の働きは潤滑化である。

(24) a. The tsunami hit the coastal village, causing serious damage.
b. The tsunami hit the coastal village, and caused serious damage.

(24a) と (24b) を比較すると，後者の方がぎこちない。A and B and C … といった parataxis（並列構造）は単調である。そのため，定型動詞の並列を避けるのが一般的傾向である。その際の便法の一つが分詞構文になる。また，同時性や継続性を writing においても表現できる利点がある。節と節との滑らかな連結性という観点から，この種の分詞構文が書ける必要はある。分詞構文を PG 視点から分析した結果，どの用法を production level にまで高める必要があるかが明白となる。

ここで，分詞構文の writing における意義を強調したい。上で見た通り，分詞構文は variety を提供する有用な手段の一つである。定型動詞の並列など同一構文の繰り返しは, 単調・平板な表現の温床である。分詞構文を有効活用することにより，豊かな表現が可能になる。

３．６　分詞構文の一般的留意点

以下に留意すべき７点に言及する。

(25) <u>Walking from the library</u>, we talked about the coming midterms.

(25) の下線部は「図書館から歩いていた」のみを描写しているだけである。接続詞がないため，後半との関係が不明確である。つまり，主節部である we talked … midterms と論理的な関係で結ばれていない。While we were walking … と rephrase 可能だが，reader が常識的にそう判断しただけである。

（26）a. Touring Korea, Taro became ill.
b. While he was touring Korea, Taro became ill.
c. As/Since he toured Korea, Taro became ill.

（26a）を paraphrase すると，（26b）や（26c）が考えられる。しかし，（26a）のみ与えられた場合，reader は（26b/c）いずれになるかは分からない。分詞構文単独では極めて曖昧であり多様性がある。それにも拘わらず，分詞構文を単独で羅列させ，各々の文意を［時･条件･原因 / 理由・譲歩・付帯状況］の用法に分類させる指導が依然繰り返されている。条件・譲歩といった用法そのものに問題があるだけでなく，単文のみで用法を分類させる愚に早く気づかねばならない。その際に必須なのが分詞構文の pedagogical grammar である。

また，（26a）の近似値として（26b-c）を挙げたが，感覚は異なる。（26b-c）は「～ので … だ」や「～だから … だ」となり語感が硬くなる。一方，分詞構文の（26a）は，「～て / で … 」で原因・理由が示される時の表現である。分詞節と主節の流れるような重なり合いを従来の指導は全く押さえられていない。PG の出番である。

次に，分詞構文の位置を取り上げる。

（27）a. Opening the bottle, the waiter decanted the wine and poured the first glass.
b. The waiter opened the bottle and, decanting the wine, he poured the first glass.
c. The waiter opened the bottle, decanted the wine, and poured the first glass.

教育現場では，（27a）と（27b）に関して不毛の指導が横行している。いずれを分詞節にするかで二者択一の選択を学習者に求めるのである。一般的に行為の順次性を示す場合は分詞節を文頭に置くのが普通であるが，（27b）と表記しても特に問題はない。連続性を示すのが本意であるので，分詞構文のこころに耳を傾けたい。（27c）との対比は既述した通り，（27a）および（27b）の方が文体上美しい。

第 3 に完了形の分詞構文を扱う。要諦は，意味が曖昧になるのを避ける時のみの使用である。

（28）a. ?Eating his dinner, he rushed out of the apartment.
b. Having eaten his dinner, he rushed out of the apartment.

（28a）のままでは，「食べ物の皿を持ったまま，家を飛び出した」の解釈が成立する。通常であれば context の制約が働くが，現実世界では当該解釈が十分成り立つ。つまり，意味が曖昧なままである。ところが，（28b）と表現すると，「食事を済ますと，彼は家を飛び出して行った」の一義的解釈に落ち着く。完了形が文体上好ましい理由である。　同様に，以下の（29a, 29b）を比較したい。

（29）a. ?Reading the instructions, Takako snatched up the fire extinguisher.
b. Having read the instructions, Takako snatched up the fire extinguisher.

(29a) では「指示を読みながら，消火器を掴んだ」の読みが可能となる。(29b) は「指示を読むと，消火器をぐっと掴み上げた」となり，意味の混乱を防いでいる。高校教育現場では完了形分詞構文の form を与えることが目的化し，何のために完了形という複雑な form をわざわざ言語化するのかという視点が欠落している。完了形の分詞構文は頻度が基本的に低い。敢えて使用するには理由がある。教師が分詞構文の PG に習熟し，意味のやり取りに焦点を置いた target items の導入が望ましい。

第４に，過去分詞の分詞構文に触れる。頻度の上では現在分詞の分詞構文が圧倒的に多いが，過去分詞の分詞構文が皆無というわけではない。

(30) a. Made by Toyota, this car is extremely expensive.
b. Made by Ferrari, this car is extremely expensive.

(30a) の訳出を「トヨタによって作られたので，この車は非常に高価だ」で済ます教師が多い。これでは「トヨタによって作られたこと」が高価な原因・理由となってしまい，必ずしも正確とは言い難い。トヨタは庶民向けの比較的低価格な車も製造している。この種の誤りの根本原因は，接続詞文と分詞構文との差異を教える側が認識していないことにある。分詞構文は，接続詞文と異なり，主節との意味関係を明確に区分けしない。むしろ，主節へ繋ぐ流れを文性としている。そこで，(30a) の文意は「トヨタによって作られたこの車は … / トヨタが作ったこの車は … 」とする方が分詞構文が意識する連続性を適切に表現している。ここでも PG が必要となる所以である。なお，(30b) であれば，「フェラーリによって作られたので … 」は問題ない。非常に高価な車のみを製造するからである。

第５に，分詞構文の役割を考察する。上記 (30a) の訳出には疑義を呈される可能性がある。分詞構文の役割は副詞であるから，形容詞的な解釈は誤りであるとする立場である。果たして，分詞構文の役割は副詞のみであろうか。*Encyclopædia Britannica* (1994) の impatiens (ツリフネソウ) の項目に以下の例文がある。

(31) The name, meaning “impatient,” refers to the readiness with which the plants’ seeds are dispersed.

(31) の meaning “impatient” は副詞的働きでなく，非制限用法の関係詞節 (= which means impatient) と同等の働きをしている。つまり，分詞構文は形容詞的な役割も持つと解釈できる。形容詞の働きは制限用法（分類的形容詞）と非制限用法（特性記述形容詞）に大別される。以下の (32a, b) は非制限用法の例である。

(32) a. the hard-working Japanese
b. Come and see my beautiful wife.

(32b) は my wife, who is beautiful の意であり，美しくない妻がもう一人いることは通常では想定されない。この非制限用法に留意すると，分詞構文の形容詞的用法が理解し易い。

以下の通り，過去分詞による分詞構文でも同例は多い。

（33）a. Pocket Monsters, also known as Pokémon, are popular among children.
b. He flies over an airway marker beacon, known as a “fix” to the initiated. (OED, 2010)
c. Deaths due to malignancy were mainly linked to smoking, previously shown as common in our cohort. (OED, 2010)

従って，（30a）は次のように言い換えられる。

（34）This car, made by Toyota, is extremely expensive.

第６に，文頭の Being の有無を検討する。

（35）a. Being [Having been] translated in a literary style, this book is my favorite.
b. Translated in a literary style, this book is my favorite.

（35a）は「文語体で翻訳されたこと」が好きな本の原因・理由になっていると考えられる。being が省略された（35b）は，原因・理由の nuance を感じにくい。即ち，省略により分詞構文の軽さがさらに軽くなったと解釈される。一方，（35a）では，意味の上で不要な being を意図的に明記することにより，原因・理由といった意味関係の nuance が通常よりも強く醸し出されている。もちろん，being が省略されても，意味内容により因果関係を伝えることは可能である。

最後に，分詞構文を２つ続けて使用する例を紹介する。

（36）Not knowing the language and having no friends in the town, Kanako found it hard to get work.

native speakers of English の立場から（36）を眺めると何の変哲もない表現である。ところが，日本の高校生は（36）を見て当惑する。接続詞 and 以下の having no friends in the town の 分詞 having の機能が理解できないのである。理由の一つは，分詞構文を「～ ing … , 主語＋動詞 …」といわば公式化して学習し，分詞が連続する形を処理できないのである。PG を用いて分詞構文の function に気づきを与えておれば（36）の意味処理は造作ない。英語表現の別の特徴である構造の類似性に着目しつつ，form-meaning-function のつながりを意識させたい。

３．７　分詞構文と類似表現

（37）a. Taro, told of his son’s accident, immediately phoned the hospital.
b. Taro, who was told of his son’s accident, immediately phoned the hospital.
c. Taro was told of his son’s accident, and he immediately phoned the hospital.
（38）a. Jiro, knowing that his wife was expecting a baby, started to take a course on baby care.
b. Jiro, who knew that his wife was expecting a baby, started to take a course on baby care.
c. Jiro knew that his wife was expecting a baby and he started to take a course on baby care.

（37a）（38a）を眺めてみると，（37b, c）や（38b, c）のように nonrestrictive relative clauses（関係代名詞の継続用法）や and-coordination（等位接続詞 and）との類似性が窺える。ただし，Bolinger（1977）が喝破したように，形が異なれば意味も異なるのである。分詞構文を用いた（37a）（38a）は，意味の曖昧さと引き換えに，簡潔さと読み手の解釈の自由度を与えている。すなわち，文体上・意味上の違いが存在する。また，話し言葉では分詞節といった従属節構造を頻繁に用いない。and/but/or/so といった等位接続詞を用いて sentences を繋いでいく。

３．８　分詞構文と日本語文との類似性

付帯状況を表す日本語文はナガラ節で表現される。

（39）a. TV を見ながら，返事をした。
b. ? 返事をしながら，TV を見た。
c. 返事をしてから，TV を見た。

（39b）の容認性が下がるのは，前半部の動詞の継続性が少ないからである。「うん」と返事をすることは瞬間的なため不自然になる。他方，（39a）は十分な持続性が推論されるため容認される。英語の分詞構文も同様である。

（40）a. Walking home, Yuko found a 500-yen coin on the street.
b. *Finding a 500-yen coin on the street, Yuko walked home.

（40b）が容認されないのは，（39b）で見た通り，瞬時的な内容と分詞構文の継続性が矛盾するからである。（40a）は分詞構文本来の用法であり全く問題ない。従って，継続性が保証されれば，英語の分詞構文は日本人学習者にとって違和感のある表現ではない。

日英の類似性で確認すべき要素は，認知言語学で指摘される「図 (figure) と地 (ground)」の関係である。図とは焦点化された要素であり，地はその背景になる。（39a）および（40a）の前半部は地であり，継続的な事態と捉えられる。後半部は図であり，瞬間的な事態とみなされる。教師が「図と地」関係を PG に含めておけば，分詞節と主節との継起関係を図示しながら解説できる。

但し，Figure-Ground 原則は単純に処理できない。河上（1996）から引用する。

（41）a. Singing an aria, the costume of the soprano singer ripped open.
b. Her costume ripping open, she sang an aria.

アリアは長い曲のため，「さっと破れた」意の後節の方が（41a）の通り figure と認識される。ところが，（41b）では，Her costume ripping open が ground として機能し適格文である。これが可能になるのは「徐々に破れた」の読みを行い，figure となる歌う行為を際立たせているからである。字義通りの解釈だけに終わらず，言語使用者の主体的かつ能動的な捉え方が要点になる。

３．９　分詞構文の指導上の困難点

「母は新聞を読むとき，眼鏡をかける」を伝えたい時，いかなる英語を用いるか。３．１節で述べた分詞構文の生成手順を踏まえ、川上（1991）の例文を参考に表現してみる。

（42）a. When my mother reads the newspaper, she wears glasses.
b. My mother wears glasses when she reads the newspaper.
c. ?Reading the newspaper, my mother wears glasses.
d. ?My mother wears glasses, reading the newspaper.
e. ?Wearing glasses, my mother reads the newspaper.
f. ?My mother reads the newspaper, wearing glasses.

（42a, b）は問題ない。通常の接続詞文であり，文法・意味の両面から適切である。一方，（42c, d, e, f）は全て awkward である。good English と評価できない。分詞構文生成手順に機械的に従った結果，語用論的観点を無視している。「眼鏡をかける」を陳述の中心と考えた場合，（42e, f）は逆行している。では，（42c, d）が適切でない理由は何か。先ずは，前節３．８で述べた「図と地」の関係が見えない。分詞節 reading the newspaper を地とみなしても，主節は図にならない。「新聞を読む」と「眼鏡をかける」を比較した場合，意味上の重みは前者にかかるのが通常の解釈である。にも拘らず，重みのある「新聞を読む」を分詞化して軽くすることが不自然さにつながる。「図と地」の対比が見えにくいので，受け手はぎこちなさを感じる。分詞構文のこころは曖昧さである。けれども，成立には一定の条件がある。条件に違反すれば，未熟な表現に堕する。分詞構文の prototype は，ある事態の側面に着目し，残る一方の事態は付随的な状態とみなすのである。つまり，２つの情報の軽重を簡潔に明示する利点がある。加えて，当該日本文を分詞構文で表現する必然性がない。一般的な表現であるから，無標の接続詞文を用いるのに躊躇しない。speech level は通常の口語体であり，formal に表現する必要は皆無である。物語文でもなければ，簡潔性が問われる場面でもない。語用論的に要請されていない文体と言える。他方，以下の例文を検討する。

（43）a. When reading the newspaper, my mother wears glasses.

b. My mother wears glasses, when reading the newspaper.
c. My mother reads the newspaper with glasses on.

(43) のように接続詞を補ったり with-construction で敷衍すると，acceptable な英語表現となる。ambiguity が求められる context ではなく，従属節と主節の連続性を要求される situation でもない。接続詞を補足することにより，過度の不明瞭さが排除され，主従関係が明白になる。明確に「時」を意識する際は, 通常の接続詞文か分詞節の直前に接続詞を補った文を用いたい。

本節で検討した通り，教師側でさえ分詞構文を使いこなすには多大な困難を伴う。学習者にこれを強制するのはもはや学習虐待となる。繰り返すが，分詞構文は recognition level に基本的に留めておくのが望ましい指導形態である。また，「分詞構文」の名称は misleading である。「構文」と形容することにより，重要文法項目であるとの印象を学習者に過度に伝えることになる。分詞の一用法に過ぎないとの冷静な対応が求められる。

Ⅵ　おわりに

本論では，教師側が備えておくべき分詞構文の指導者文法を９つの観点から考察した。先ず，分詞構文と接続詞文の差異と特徴を指摘し，曖昧性と明確化との対比を行った。 次に，分詞構文の production に言及し，recognition level に留めておく理由を説明した。第４節では，分詞構文の頻度を検討し，fiction における有用性を明らかにした。さらに，分詞構文の４つの働きを取り上げ，拡充・焦点・簡潔・潤滑の key phrases を核に詳述した。続いて，一般的留意点を７つに分け，論理関係を中心に陥りやすい誤解とその解法を明示した。第７に, 分詞構文と類似表現の共通性と異質性を検討した。第８に日本語文との類似性を論じた。最後に，指導上の問題点を明確にし，教師の取るべき立ち位置を改めて確認した。今後は，中高で扱う全文法項目に対する pedagogical grammar の構築が待たれる。

参考文献

安藤貞雄 . (2005).『現代英文法講義』. 東京：開拓社 .
荒木一雄 . (1986).『英語正誤辞典』. 東京：研究社 .
荒木一雄 . (1996).『現代英語正誤辞典』. 東京：研究社 .
井上永幸（編著）. (2012).『ウィズダム英和辞典』.（第３版）. 東京：三省堂 .
伊藤たかね・杉岡洋子 . (2002).『語のしくみと語形成』. 東京：研究社 .
Bolinger, Dwight. (1967). Adjectives in English. *Lingua* 18:1-34
Bolinger, Dwight. (1977). *Meaning and Form.* UK: Longman.
Carter, Ronald and Michael McCarthy. (2006). *Cambridge Grammar of English: A Comprehensive Guide*. Cambridge: Cambridge University Press.
Collins Cobuild. (2014). *Collins COBUILD Advanced Learner's Dictionary.* (5th ed.). London: Collins.
Declerck, Renaat. (1991). *A Comprehensive Descriptive Grammar of English.* Tokyo: Kaitakusha Co.

江川泰一朗 . (1991).『英文法解説』.（改訂三版）. 東京：金子書房 .
Eastwood, J. (1994). *Oxford Guide to English Grammar.* Oxford: Oxford University Press.
Fernald, Theodore B. (2000). *Predicates and Temporal Arguments*. Oxford: Oxford University Press.
Givón, Talmy. (1984). *Syntax,* Vol. Ⅰ . Amsterdam: John Benjamins.
Grice, H. Paul. (1991). *Studies in the Way of Words*. (Reprinted). Cambridge, MA: Harvard University Press.
Hemingway, Ernest. (1952). *The Old Man and the Sea*. New York: Charles Scribner's Sons.
Hudson, Richard. (1975). Problems in the analysis of -ed adjectives. *Journal of Linguistics* 11: 69-72.
Jesperson, Otto. (1909-42). *A Modern English Grammar on Historical Principles,* 6 vols. George Allen & Unwin, London.
大西泰斗・ポール・マクベイ . (2011).『一億人の英文法』. 東京：東進ブックス .
影山太郎 . (1996).『動詞意味論』. 東京：くろしお出版 .
神尾昭雄 . (1990).『情報のなわ張り理論』. 東京：大修館書店 .
神崎高明 . (1994).『日英語代名詞の研究』. 東京：研究社 .
河上道生 . (1991).『英語参考書の誤りとその原因をつく』. 東京：大修館書店 .
河上誓作 . (1996).『認知言語学の基礎』. 東京：研究社 .
國廣哲彌（編著）. (1993).『ランダムハウス英和大辞典』.（第２版）. 東京：小学館 .
久野暲 . (1978).『談話の文法』. 東京：大修館書店 .
Lakoff, George. (1987). *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind.* Chicago: The University of Chicago Press.
Langacker, Ronald W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar,* Vol. 1., Stanford University Press, Stanford.
杉山忠一 . (1998).『英文法詳解』. 東京：学習研究社 .
鈴木孝夫 . (1973).『ことばと文化』. 東京：岩波新書 .
澤田治美 . (1993).『視点と主観性』. 東京：ひつじ書房 .
高橋作太郎（編著）. (2012).『リーダーズ英和辞典』.（第３版）. 東京：研究社 .
竹林滋（編著）. (2002).『新英和大辞典』.（第６版）. 東京：研究社 .
角田太作 . (2009).『世界の言語と日本語 改訂版 ― 言語類型論からみた日本語』. 東京：くろしお出版 .
中右実 . (1994).『認知意味論の原理』. 東京：大修館書店 .
野口正樹 . (2017). Pedagogical Grammar の理論的整理：人称代名詞 .『沖縄国際大学総合学術研究紀要』. 第 20 巻，第１号 .
野村恵造（編著）. (2016).『オーレックス英和辞典』.（第２版）. 東京：旺文社 .
Nesfield, John Collins. (1912). *Modern English Grammar.* London: Macmillan.
益岡隆志（編著）. (2008).『叙述類型論』. 東京：くろしお出版 .
三浦つとむ . (1976).『日本語とはどういう「言語か』.　東京：　講談社学術文庫 .
McHenry, Robert. (Ed.). (1994) *Encyclopædia Britannica*. Chicago, IL: Encyclopædia

Britannica.
Murphy, Raymond. (2012). *English Grammar in Use*. Cambridge: Cambridge University Press.
南出康世（編著）.『ジーニアス英和辞典』.（第５版）. 東京：大修館書店 .
宮川幸久（編著）. (2010).『アルファ英文法』. 東京：　研究社 .
Pearson Education. (2014). *Longman Dictionary of Contemporary English.* (6nd ed.). London: Longman.
Pesetsky, David. (1996). *Zero Syntax: Experiencers and Cascades,* MIT Press, Cambridge, MA.
Procter, Paul. (Ed.). (1997). *Cambridge International Dictionary of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
斉藤秀三郎 . (1898-99). *Practical English Grammar.* 東京： 興文社 .
Soanes, Catherine. (Ed.) (2010). *Oxford Dictionary of English*. (2nd ed.). Oxford: Oxford University Press.
Stevenson, Angus (Ed.) (2010). *The New Oxford American Dictionary.* (3rd ed.). Oxford: Oxford University Press.
Swan, Michael. (2005). *Practical English Usage.* (3rd ed.). Oxford: Oxford University Press.
Thomson, A. J. and A. V. Martinet. (1986). *A Practical English Grammar.* Oxford: Oxford University Press.
Turnbull, Joanna. (Ed.). (2015). *Oxford Advanced Learner's Dictionary.* (9th ed.). Oxford: Oxford University Press.
安井稔 . (1982).『英文法総覧』. 東京：開拓社 .
安藤貞雄 . (2005).『現代英文法講義』. 東京：開拓社 .
山岡實 . (2005).『分詞句の談話分析－意識の表現技法としての考察－』. 東京： 英宝社 .
山梨正明 . (1992).『推論と照応』. 東京：くろしお出版 .
綿貫陽（編著）. (2000).『ロイヤル英文法 改訂新版』. 東京：旺文社 .
綿貫陽・マーク・ピーターセン . (2006).『表現のための実践ロイヤル英文法』. 東京：旺文社 .